
私の最高傑作は冥王です

屋猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の最高傑作は冥王です

【Zコード】

Z4327BA

【作者名】

屋猫

【あらすじ】

魔女のジュラは魔の森で魔剣に体を貫かれた男を見つける。
その男を憐れに思ったジュラは、男の命を助けたのだが・・・

後に冥王として奈落の王となる魔剣士オズウェルと、冥王を生み出してしまった魔女ジュラのお話し。

1 魔の森 ナロモリ にて（前書き）

初投稿です

1 魔の森 ナロモリにて

ジュラは薬と防具の練成に使用する材料を調達し、魔の森の空を帰途についていた。

しかし突然、乗っていた騎獣が警戒態勢に入つたのだ。

騎獣の様子から魔物の気配ではない。騎獣が警戒しているほらへ慎重に近づいてみる。

やがて、騎獣が警戒していたものが何なのがジュラにも分かつた。血の臭いだ。濃い血の臭いが立ち込めている。それは、上空にいる防護布を口につけている、ジュラの所まで漂つてくる。今は見えない地上は、どんな状態になつているのか。

しかし、ジュラが現在いる場所は魔の森ナロモリといえ、その入り口付近である。最深部でもないのに、凶暴な魔物が出る事はまずない。

「・・・はぐれ妖魔でも出たのかなあ」

地上には生き物の気配はない。鬱蒼と茂る木々の間から、様子を窺うことは出来ない。だが、騎獣も血の臭いを警戒しているだけで、危険はなさそうである。

定期的に魔の森ナロモリに来る身としては、様子を確認するくらいしておいた方がいいだろつ。

騎獣に地上に降りるよつに指示する。ゆつぐつと地上の様子が見えてくると、そこは血の海だった。

魔の森の大地は、土地全体が魔の瘴気を帯びているために青白い。
ナロモリ
そして草木は灰色を帯びてくすんでいる。

だがジユラが降り立つたそこは、辺り一面、鮮やかな赤に染め上げられていた。青白いはずの地面も、灰色の草木も赤い。真っ赤だ。所々にみえる白っぽい物は、骨や肉片だろう。元の原型を判別するのは難しいが、人間だったようだ。

よくみると、赤い海には剣や鎧が沈んでいる。それから判断するに、どこかの国の騎士たちの物のようだ。

・・・魔術の気配がする。何かの儀式かなあ？

ざつと周囲の様子を見たジユラは、空間に立ち込める魔術の気配に気付いた。魔女であるジユラが使う魔法とは構造が違うため、はつきりとは解らないが、何かを成す為に儀式的な魔術が行われていたようだ。

複数の魔術の気配がする。複雑な構築をしているみたいだけ
ど、・・・失敗したのかなあ。

血の渴き具合から、半日近く経つているようだ。構築されていた魔術は殆ど拡散して、その全容は掴めない。残った余韻が獣達を遠ざけているが、それも直ぐに消えるだろう。明日には僅かな痕跡を残して、獣や下位の魔物が全て片付けてしまうに違いない。

ジユラはこの場に留まつても得られる情報はもうないと、その場を発とうとした。

だがしかし、その時、微かな命の気配を感じた。

この地獄のような場所の中央附近。魔術の気配が一番濃い辺りだ。人間がこの場で生き延びているとは思えない。気のせいかもしないが。

ジュラが中央に近づくと、はたしてそこには、人間が生きて居た。

「驚いたこと。こんな状態で、生きているなんてねえ」

その人間は全身血まみれで、肌の色も髪の色も分からぬ。体格からして男だろう。だが、背丈は解らない。

四肢が膝、肘辺りで千切れていったからだ。胸に中ほどで折れた両刃の剣が刺さっている。しかし、その胸は上下しているのだ。

「これは、……この剣に生かされているのかなあ？」

男の状態はどう考えても人間が生きているはずのないものだ。上級魔族の中でも再生能力の高い者で無ければ、瀕死の状態だ。

「抜けば、死ぬかな？……いや、うーん、剣に魔力が？魔術が半端に起動してるのは？……抜いたら妖霊化しそうだなあ。」

男に突き刺さっている剣。おそらく行使された魔術の影響で、不完全な魔剣と化しているようだ。その剣の魔力の影響で男は死ない。しかし、半端な魔剣は、男を再生するほど魔力を持たないため男を回復させることは出来ず、結果的に

「死ねない状態でここに・・・。剣を埋め込めば、助かるかなあ？いや、体は治るかもしれないが・・・、精神がどうなるか」

ジュラは男の状態を詳しく観察して、深く溜息をついた。このまま放つておけば、十中八九男は妖魔化するだろう。それも、ここに漂う数知れない無念の靈を抱えて。剣を抜けば男は死ぬが、その魂は魔術の影響を受け靈体の妖魔、妖靈となりそうだ。

男に刺さっている剣を浄化し、抜いてしまえば良いのだろうが、

「困ったな。このまま放置するのは物騒だが、解放することも出来ないし」

魔女のジュラは魔法を使つことができる。魔法は人間が使う魔術よりも高度で複雑な事象を引き起こすことができるが、万能ではない。

そして、人間の使う魔術は欠陥が多く、魔術で強引に干渉すると魔力が暴発してしまうことがあるのだ。

抜くには、中途半端に作用している魔術に魔法で干渉しなければならないだろう。

「・・・仕方ないな。家に持つて帰るかあ」

2 黒い森 //コロワル

森で半死半生の男を見つけてから1-3日目。ジュラは黒い森にある、白毛に籠つていた。

ジュラは一年の半分を素材集めの旅、残りの半分を練成に費やしている。数ヶ月旅に出る事もあれば、同じく家に籠る事もある。

ジュラの白毛は、生活区間と鍊金術を行う工房、そして、騎獸を飼育している小さな牧場で構成されている。

生活区間は千年を超える靈樹と融合しており、その地下は、試験的な魔法を使用する特殊な空間となっていた。

地下は靈樹の根があちこちから顔を出している。その根が、魔法の暴発を防ぐのだ。

地下の一一番奥、根が絡みつくように白い塊を支えていた。3メートル以上はありそうな巨大な塊である。表面が細かい糸で覆われ、虫の糞の様だ。

白い糞は鼓動のように淡い明滅を繰返している。ジュラは糞にそつと手を触れ、糞を閉じて瞑想しているようだった。

「今晚、あたりかな」

糞から手を放すと、ジュラは眉間に皺を寄せて黙り込んだ。

そして視線を地下にある棚に移す。

地下の棚には、様々な魔具が置かれている。ロープ、櫛、鎧など

の防具。剣、弓、斧、杖などの武具。聖気、邪氣を帯びているものなど様々であるが、その中にガラス瓶に入った剣があった。

魔の森ナロモニで男を貫いていた剣だ。折れた剣は赤黒く血に濡れたままで、本来の色は分からぬ。

そして、剣の先には脈打つ心臓が突き刺さつていた。

ジュラは男を家に連れ帰り、剣と男の肉体を分離させようとした。靈樹の根が守る地下でなら、多少強引でも問題ないだろうと判断したからだ。

しかし、予想外の問題が発生したのだ。中途半端に魔剣と化していた剣は、これまた中途半端に男の肉体と融合していた。

行使された魔術と魔の森の瘴気、そして辺りに満ちていた無念の怨念が重なり、男の肉体を人ならざるものへと変えてしまっていた。男の体は半分魔剣となっていたのだ。折れたように見えた剣は、その半分が男の体に溶け込んでしまっていた。

ジュラは当初、男と剣を分離し、剣は浄化して無に返し、男も人間として蘇るつもりだった。

そもそも、剣が分離してしまえばその力で生きながらえている男は、死んでしまうはずだった。

しかし、計画的に起きた魔剣化ではないので、融合の仕方が複雑でなおかつ不完全なため、分離が不可能な状態になっていた。

男と剣を滅する方法もあるが、ジュラの魔力では魂までは滅ぼせない。深い恨みを抱えた魂は世界にとつて、厄災にしかならないだろう。

残る選択肢は男も剣も一緒に封印してしまうことだ。

それを靈樹の根元に埋めてしまえば、半永久的に見つかる事もないだろう。

そして、男も死地の境を半永久的に彷徨うことになるのだ。

ジュラはこの男が何処の誰なのか、善人か、悪人か、名前すら知らない。

だが、ジュラは赤の他人であるこの男の境遇が、とてもなく憐れになつた。

だから、助ける事にしたのだ。人間でも無く、魔剣でもなくなつてしまつたこの男を。

失われた四肢の代わりを生成し、男の肉体と繋げた。

欠損していたのは他に、左目、臓器が幾つか、それらも全て入れ替えた。

脳が無傷だつたのは幸いだつた。脳の再生は骨が折れるし、失敗しやすい。

おそらく、再生されなかつた箇所は、魔剣が男を貫く前に負つた傷だらうと思われた。ゆえに、魔剣は男の完全な状態を知らない、よつて完全な再生が行われなかつたのだ。

「止めを刺すために使われた剣が、その命を繋ぐなんてねえ。」

男の肉体を改造しながら、ジュラはぼつりと呟いた。

だが、そこである考えが胸をよぎる。

「この剣が、男を殺すための物ではなく、この状態で生かし続けるためのものだつたら？」

その考えにジユラはぞつとする。人間は愛情深い者いるが、同じくらい残酷で冷酷な者もいることを、ジユラはよく知つていたからだ。

あらかた肉体の差し替えが終わると、元の肉体と馴染ませるために、男の体を妖天の繭の中に入れ特殊な羊水で満たした。

その作業に三日ほど掛かつたが。その間も男と魔剣の融合は少しずつ進んでいた。男の体から出でていた部分は、当初の半分もない。

男を繭に入れてから10日。魔剣は殆ど男の心臓と融合していた。棚に置いてある瓶は、魔剣の様子を見るための魔具だ。

今夜は満月、月が真上に来る頃には男と魔剣は完全に融合するだろう。そして妖天の繭は破れるはずである。

「結構無茶な繋げかたしたからな、ちゃんと人の形になつてゐるかなあ？」

3 満月の夜に

夜空に大きな満月が輝いている。魔力が満ちている黒い森ミリロロカでは、他の地域よりも大きく田に映る。

ジュラは居間の一階の暖炉の前で、騎獣のヴァスとまどろんでいた。

ヴァスは巨大な黒い虎の妖獣である。天虎てんじと呼ばれる、東方の大陸に住む妖獣で、空を飛ぶ事ができる大型の騎獣だ。

天虎は気性が激しく、人にはまず馴れないが、足が速く頭が良いうえに戦闘能力も高い。小さい幼獣のころから育てれば、素晴らしい騎獣になる事で有名である。

天虎てんじは白い毛皮に黒い縞模様が美しい妖獣なのだが、極稀に黒い体毛を持つものが現れる。

ヴァスは黒地に朱金の縞じやくをもつ、黒天虎こくてんじだ。

ジュラは極上の黒毛皮に埋もれながら、睡魔と闘つっていた。

「ううん。眠い、眠いよお、ヴァス。・・・ね、たら・・・駄目、なの・・・に」

男を連れ帰つてから二週間近く、ジュラは働きづめだった。一つのことに没頭すると、周りの事が見えなくなる研究者氣質のあるジュラは、不眠不休で男の再生作業を行つていたのだが、ここで限界が来てしまった。

騎獣のヴァスは太く逞しい尻尾でジュラの頬を撲つっていたが、主

人が完全に眠りに落ちてしまった事を確認すると、ジユラを包みこむように自分も寝る体制に入ってしまった。

ジユラは小刻みに揺れる振動で目が覚めた。誰かがジユラの体を揺さぶっている。

連日連夜の作業ですっかり深い眠りに落ちていたジユラにとつては、とても不快なものだ。

「うう、あと、少しだけ、・・・あと少しで、・・・少し・・・で？」

もう一度、眠りの世界に落ちようとヴァスの毛皮に縋りつきかけたジユラは、突然飛び起きた。

「あと、少しで生まれるじゃんかあ！」

ヴァスは突然大声を上げたジユラに迷惑そうな視線向かたが、直ぐに目を閉じて寝てしまった。

「い、今、何時だ。どのくらい寝こけてたあ！」

ジユラは寝起きで乱れた髪もそのままに、立ち上がりうつとして、出来なかつた。

「え？う、わあ、あ！・・・ゆ、ゆ、揺れてる？」

先ほど感じた小刻みな振動は、家の床が揺れているためのものだつた。それは徐々に大きくなつていて、ジユラは床から立ち上がる事が出来ず、座りこんでしまつた。

イスが倒れ、棚の瓶が落ち、籠の中の物が散乱する。

揺れはどんどん激しくなり、棚や大きな壺までもがぐらぐらと揺れ始めた。

「靈樹の根が、震えている？・・・まさか、そんな、魔力が暴走しかけてええ、あわわあ」

暖炉の前から動くことが出来ないジュラを、ヴァスが口に銜えると裏口にある騎獣専用の入り口から、外に飛び出た。

ジュラは家の外に飛び出してから、日に飛び込んできた光景に呆然とした。

「れ、靈樹が、・・・そんな馬鹿な。」

ジュラが住居にしている靈樹は、マルガゴクと呼ばれる木の変種である。魔力を根から吸収し葉に蓄積するという特徴を持つ。そして、本来は人の背丈ほどにしか成長しない。

だが、ジュラの住む靈樹は突然変異により、幹が一軒家ほどのある巨木に成長して靈樹となつた。大きさも異常だが、木が蓄える魔力量も尋常な量ではない。

マルガゴクは、魔力と清水を糧に成長するので、それさえ枯渴しなければ枯れることはないのだが。

「靈樹が、か、枯れてる！」

ジュラはヴァスの背に乗り靈樹の様子を観て廻り、愕然とした。

青々と茂り、夜の暗闇の中でも魔力に満ちた葉はキラキラと輝く。幹は逞しく、大地に伸びる根も力強い。

魔女の森とも呼ばれる、アンティヤクティ力にある、母なる木程ではないが、美しい大樹だ。

その靈樹は、枯れようとしていた。瑞々しかつた葉は茶色く萎み、幹は輝きを失い、いくつもの亀裂が入っている。根にはまだ輝きが残っているが、それも徐々に失

われているようだ。おそらく急激に魔力を失ったためだろう。

ジュラが感じた振動は、靈樹の幹が枯れ崩壊し始めた為に発生したものだった。

ヴァスの背に乗り、空中にいるジュラには振動はつ伝わらないが、目視で見る家は激しく揺れているようだ。おそらく家の中は見るも無残な状態だろう。

「そんなあ！こんな破壊的に魔力を使う魔法なんて、使つてないのにい！」

ジュラが靈樹の無残な姿に、思わず叫ぶと、靈樹の崩壊と振動が止まつた。

良く視ると根の部分は僅かに輝きが残っている。完全に枯れてしまうことは無かつたようだ。

・・・あれか？これは、あれが原因か？・・・あの入間と魔剣か？

靈樹とその根元にちょこんとくつ付いている我が家を視界に入れながら、ジュラの思考はぐらぐらと揺れたままだった。

人間だぞ！靈樹の魔力吸い尽くすって、どんだけじやい！・・・あれか、適当にくつ付けた手足の素材の、あれとか、それとかか！

心中でぶつぶつと呟きながら、ジユラはまゆっくつと家の方に近づいた。

補強と改修の自動魔法を掛けている家は、思つたほど外見的な被害は少なく、修復も始まつていた。

ヴァスには牧場に戻るように指示を出し、ジユラは家の中に入る。・・・んー、徹夜の乗りと勢いで作ったからなあ。何混せたかなあ。正確に思い出せないぞ。まずいなあ・・・

家の中は竜巻が中を通過したようなひどい有様だったが、一體のゴーレムを起動させてさつと地下室に向つた。

地下は予想より遙かに状態が良く、物も散乱しておらず、むしろ何時もよりきれいである。

「きれいすぎだあ！・・・作つた魔具が、全部！・・・無くなつて

る！」

それはジユラにとって、靈樹が枯れる光景よりも衝撃的な光景だった。

ジユラが今まで制作、或いは手に入れ改造してきた数々の魔具。それも厳選した魔具ばかりをこの地下に保管して舍つたのだが。

「ない、・・・ない。・・・一つもない！焰竜王の剣も、鳳凰弓も、邪剣アグニグルも、聖賢天の籠手も、自信作の飛仙刀もお！」

所狭しと並べていた、自慢の魔具たちは綺麗さっぱり消え、棚しか残つていない。

そしてこの空間にあるのは空の棚と、魔具の消失に眞白になつた

ジユラ、そして

「・・・ん、今、何か音が？・・・あれ、何しに地下に来たんだ
つけ？」

物音でショックから僅かに立ち直ったジユラは、本来の目的を思
い出し、慌てて妖天の繭のところに向つ。

「あれれ？・・・随分、ちいさい、・・・なあ？」

繭は破れたところが下となり、中のものは見えないが、盛り上がりの部分から、中の大きさを予想する事は出来る。
それは明らかに、小さい。

四肢を繋ぎ、繭に入れた時はジユラより遙かに大きかつたはずだ。
目の前の塊は、四肢を繋ぐ前よりも小さくなっている。

「失敗かあ？でも、息は・・・してるねえ」

ジユラは白い繭の塊にそつと近づくと、繭をそつと破いた。

「・・・こ、ども？」

白い繭の中には、黒髪の子どもが横たわっていた。10歳ほどだ
ろう。足を抱え込むようにして折り曲げ、胎児のように丸まり横た
わっている。

「おかしいなあ、・・・逆行の魔法なんて、使つてないぞ？」

おそれらしくの子どもは、あの魔剣と融合した男なのだろう。繋げ
た手足には薄つすらと、見覚えのある魔法の刻印が残つている。

・・・予定外の事だらけだなあ。人の原型留めてないほうが、まだ納得できるわあ。・・・性別も変わって、・・・ない。

「う・・・ん」

ジュラが子どもの足に触れたとき、子どもが僅かに声を上げた。子どもの顔を見ると、目蓋の下で眼球が動いているのが分かる。覚醒が近いようだ。

ゆつくりと黒い睫毛が持ち上がる。右目は紫眼、左は金眼のオツツドアイだ。

焦点が合わないのか、異色の眼は僅かに視線を彷徨わせていたが、覗きここんでいるジュラに気付いたようだ。

ジュラは笑顔を浮かべながら、まだ完全に覚醒していない子どもにゆづくじと、優しく話しかけた。

「私はジュラ、土の魔女のジュラ。」

「・・・・・ジユ、・・・・・ラ?」

「そ、うそ、あなたの名前は?・・・自分の名前が分かる?」

「・・・名、前・・・・名前は」

子どもの声は掠れていって、聞き取りづらいものだった。

ジュラの質問に子どもは視線を彷徨わせる。思い出をうと記憶を探っているようだ。

「オズ・ウェル。・・・名前は、オズウェル」

漆黒の髪は艶やかな輝きを放ち、肌は傷一つない白磁の陶器のようである。黒い睫毛に彩られた目の中には、紫水晶と琥珀色の宝石が輝いているが、今は目蓋に覆われて見ることはできない。

形の良い眉に、すっと筋の通った高い鼻梁。唇は薄く、引き締まつた印象を与える。それらのパートは絶妙に配置され、少年を絶世の美少年にしていた。

「……おかしい。子どもになる要素も、美形になる要素もいていない、……はず

ジュラは寝台に横たわる少年、オズウェルを見下ろしながら困惑していた。

地下でオズウェルは自分の名前を告げると、力尽きたのか気絶してしまった。気絶したオズウェルを地下から運び出し、二階の寝室にある寝台に寝かせたのだが。

「繋げた四肢も、入れ替えた器官も正常に馴染んでる。」

左手で魔法を展開し、右手に持った魔具の筆で記録をつけていく。オズウェルの経過は、実に順調だった。順調過ぎて異常なほどに。

「精神的な異常も……現時点では、なしと」

一通りの診断を終えると、ジュラはオズウェルに毛布と布団を掛け、一階の居間へと降りた。台所でお茶を入れると、それを手に一階にある書斎に入つていった。

棚だけでなく床にも本が積まれた、本だけの書斎に入る。本に埋もれるように鎮座している机に茶器を置き、机の上にある赤い革表紙を手にとる。表紙には円を描く大蛇が描かれている。最初の合成獣^{メラ}と言われている、大地^{レスラリスト}を喰らう蛇だ。

ジュラがオズウェルを再生する際に用いたのは合成の魔法。つまり、欠損部分を他の動物の部分と合成させることによって、補おうとしたのだ。補う部分は人間のものと比べても見分けがつかないよう、副原料を合成したりして加工していた。

「ええと、合成に使ったのは、と。竜の血、トルワの涙、燃えさかる羽、竜の息、絶望の溜息、黒檀、ヴァスト隕石^{キメラ}の粉……」

ぶつぶつと呟きながら、ジュラは使用した素材を整理していく。この本は合成獣^{メラ}を生成する際に、使用した材料、魔力などを記載した記録ノートである。

「副原料が58、つと。主原料は6個。・・・んん? 6?」

オズウェルは四肢と左目^左が欠損していた。臓器も幾つか損傷していたが、臓器の生成には副原料しか使用していない、主原料にはオズウェルの臓器を利用した。

なので主原料は両腕、両脚、左目^左の計5個のはずなのだが。

「んん? 六個使用したって書いてあるけど、五個しか材料名が書いてないなあ、書き忘れか、書き間違いかな? ・・・ああ、駄目だ、この記録すら正確じやないなんて」

ジュラはぐつたりと机にうつ伏せた。目視でも魔法でも、オズウェルに異常なところは見られない。健康そのものである。しかし、それは本来であればおかしな事だった。

ジユラはオズウェルが魔剣に貫かれた状態しか知らない。それ以前どのような容貌をしていたかは全く知らないが、魔剣と融合していることを除けば、完全な人間だった。

そして、欠損していた四肢は人間以外の物で補つてゐる。ということは、少なからず拒否反応が出るはずだった。

合成獣は合成する数が増えるほど能力が増え、反対に完成体の知能が落ちるという副作用が存在する。最初の合成獣、大地を喰らう蛇は数百の動植物を合成して誕生したと云われているが、破壊の本能しか残つていなかつたという。

レスプリスカは、五つの山々を喰らい、三つの湖を飲み干して、最期はゾルティア山の溶岩を飲み干さんとして燃え尽きたと云われている。

オズウェルの合成に使用した数は、知能を保てるかぎりぎりの数だった。ジユラは人型の合成獣を造つた事はないので、副作用の予測も出来なかつたのだが。

「これは、あれか。子供化と美形化が、副作用か。・・・そんなの、聞いた事ないわあ」

不思議な点はそれだけではない。オズウェルと融合したはずの魔剣、そして、消えた多くの魔具。

無機物と生物を融合させると、生物に何らかの奇形が現れるはずなのだが、オズウェルの身体は人の肉体そのものである。欠損している箇所も、異常な箇所もない。つまり、融合したはずの魔剣の影響が現れていらない。

消えた魔具については、皆田見当もつかない状態であつた。

「まあ、・・・いいか。なるみひななるわね♪」

ひとしきり頃垂れたあと、ジユリは觀念したかのよつて席を立つた。

子供用の服を制作しないとな。・・・確かに、キール綿が残つてたはず。

4 魔女の家にて（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327ba/>

私の最高傑作は冥王です

2012年1月12日21時48分発行